

Ethnobotany からみた山村生活

篠原 徹

昭和48年9月30日 受理

序 論

中国山地のどんな谷に行っても、そこには30戸前後の小さな部落が必ずある。このような部落は、かつて茅葺講や株内を中心にとまとった生活を営んでいた。標高 1000 m 近くの山々に囲まれた山村の生活は、当然その山村をとりまく自然と密接に関連している。しかし、その自然に対応する方法は、時代と共に推移してきたし、地域によっても微妙に異なる。更に、ある特定の地域で、自然全体が如何なる形で生活に入り込んでいるのかということは、意外に不明瞭である。テマガエ（田植における労力交換）の行われるようなまとまりのある集団と、その自然環境全体との関係を究明することは、山村の社会を理解する上に不可欠なことである。特に自然の最も大きな構成要素であり、彼らの生活上重要な野生植物との関係は重視されるべきである。山村の衣食住の生活の中に、いろいろな野生植物がいろいろな形でとり込まれている。また彼らは、生活空間である自然に積極的に働きかけ、彼ら特有の自然観を持っている。血縁的にも地縁的にもあるまとまりを持っている集団が、集団として自然についてどんな知識を保有し、伝承し、また変化させてきたのか？ 野生植物と生活との結びつきを媒介にして、この問題を明らかにしたい。そしてその知識の背後にある自然認識についても若干述べてみたい。

調査地は、岡山県真庭郡湯原町粟谷（旧二川村）を選び、比較対象として、広島県比婆郡東城町帝釈を選定した。粟谷は戸数40戸たらずで、西に耳スエ山（1103 m）を、北に岩倉山（1065 m）をひかえる小さな谷間の部落である。自然環境としては、耳スエ山にはブナ林が一部に残り、他は官公造林と二次林である。二次林には、カシワ、クリ、クヌギ、アベマキ、ミズナラ、ナラガシワなどが多い。中国山地にあって最も普通の山村である。調査は昭和46年4月～昭和48年8月の間、随時行った。この調査には、粟谷の方々、帝釈郷土館の方々をはじめ、多くの人々から援助を受けた。特に帝釈峡白雲洞主、積山澄晃氏には多くの植物を同定していただき、方言と和名を対照することができた。心から感謝する次第である。

（注）本文中、植物名は方言・和名の二つを併用し、和名は（ ）内に入れた。また（ ）の無いものは方言と和名が同一であることを示し、（ ）内に（？）のあるものは同定できなかったものである。また < > 内にある言葉は、粟谷で通常使われている方言である。

I 章 生活の立場からみた野生植物の利用法

野生植物は、先史時代から現在に至るまで数多くのものが、生活上利用されてきている。ある植物の利用法は、その植物の特定の形質に着目し、長い生活上の実践と伝承によって定まってきた

たものである。しかし、戦後における農山村の生活構造の変化は著しく、野草・雑木の多彩な利用といった実践的な知識も次第に消滅しようとしている。現在、山村に生活する人たちが、どのような植物を生活上で役立てているのか、粟谷と帝釈の二家族を例にあげてみよう。

利用される植物も生活の中での使われ方がさまざまである。これを大きく分類してみると、(1) 食物、(2) 民間薬、(3) 神社・寺・祭用、(4) 農具・繊維・結束・籠・その他、になる。(1) は更に、(a) 惣菜、(b) 保存食、(c) 茶、(d) 山仕事で採って食べたり、子供の食べるもの、の4つに分類できる。

—— 湯原町粟谷 (旧二川村) 7人家族の例 ——

(1) 食物

(a) 惣菜 21 種類

イクチ (アマタケ)・ウダゼリ (バイカモ)・ウド・カケゼリ (ダケゼリ)・カワタケ (コウタケ)・サンショウ・シメジ (ホンシメジ)・シモタケ (キナメツムタケ)・センボンシメジ or カブシメジ (センボンシメジ)・ゼンマイ・タキナ (ミズナ)・タラ (タラノキ)・ツクシ or ツクツクハウシ (スギナ)・テテッポ (フキ)・ナメコ・ネズミデ (ハナホウキタケ他)・ボタヒラ (マキタケ)・サマツ・モトアシ (?)・ヤブウド (ハナウド)・ワラビ・シバカツギ (ショウゲンジ他)

(b) 保存用 7 種類

ウド・カワタケ (コウタケ)・ゼンマイ・テテッポ (フキ)・ヨモギ・ケンザキホウコウ (ヤマボクチ)・チチボウコウ (ホオコグサ)

(d) 20 種類

アサドリ (アキグミ)・アタマハゲ or ハチマキイチゴ (ナツハゼ)・ウシブタイ (ガマズミ)・ウツキ (ヤマボウシ)・オオカワイチゴ (クマイチゴ)・マサキガブ (ギョウジャノミズ)・チョウチンイチゴ (スグリ)・グイビ (ナワシログミ)・クルミ (オニグルミ)・クワイチゴ (クワ)・フゴイチゴ (キイチゴ)・ジイノドウラン (サルナシ)・スウメ (スモモ)・ユスラ (ユスラウメ)・マツガブ (マツブサ)・サルイチゴ (エビガライチゴ)・ヤマブドウ・サザンキョウ (バタンキョウ)

(2) 民間薬 6 種類

キワダ (キハダ)・クロモジ・ミコシグサ (ゲンノショウコ)・ヨモギ・ジュウヤク (ドクダミ)・アスナロ・センブリ

(3) 神社・寺・祭用 7 種類

フクラシ (ソヨゴ)・センドシバ (ヒサカキ)・ハナノキ or ハナエダ (シキミ)・スギ・メンマツ (アカマツ)・ミソバナ (ミソハギ)・ボニバナ (オミナエシ他)

(4) 農具・建材・繊維・籠 14 種類

ウツキ (ヤマボウシ)・カシホシ or カシヨウセン or アカメ (ネジキ)・サンショウ・ススキ (カヤ)・ヤマカゲ (シナノキ)・ホオノキ・クリ・リョウボウ (リョウブ)・アカマツ・ケヤキ・クズボウラ (クズ)・ガヤ (イヌガヤ)・チナイ (エゴノキ)・サルスベリ (ナツツバキ)

— 東城町帝釈 2人家族の例 —

(1) 食物

(a) 惣菜 33種類

セリ・オコギ (ウコギ)・ママコナ (ハナイカダ)・タラ (タラノキ)・カケゼリ (ダケゼリ)・ダイダラ (ハリギリ)・ジョウボウ (リョウブ)・クサギナ (クサギ)・シオデ・アマナ (ナルコユリ)・アカザ・ヤマゴボウ (テリハアザミ)・イヌシーバ (ギシギシ)・ホエトニンニク (ノビル)・アサツキ・ズベラビー (ヒユ)・ヒー (イヌビユ)・イノコヅチ・ネズミデ (ハナホウキタケ他)・ベニタケ or アカナバ (?)・トコヒメジ (?)・キクラゲ・オオシバカツギ (?)・コシバカツギ (?)・ハイヒメジ (?)・ズベタケ (?)・カノコナベ (?)・ササヒメジ (?)・タニワタリ (?)・コウタケ・サマツ・アイタケ (ハッタケ)・ナツアイタケ (アイタケ)

(c) 茶 7種類

アケビチャ (アケビ)・ニンドウ (スイカツラ)・コウカイチャ (カワラケツメイ)・アサドリイチゴ (アキグミ)・フジチャ (ノダフジ)・ナワシロイチゴ (?)・笹の葉

(d) 20種類

ナツグリ (ツノハシバミ and ハシバミ)・マタタビ (サルナシ)・チンボマタタビ (マタタビ)・カメガラ or イッシショウノキ (ガマズミ)・マメイチゴ or アズキイチゴ (ウグイスカグラ)・ツチイチゴ (キビノナワシロイチゴ)・ホトケノクサイチゴ (?)・オツキ (ヤマボウシ)・アケビ・ガヤ (イヌガヤ)・ヒエンダ (カヤ)・サルイチゴ (エビガライチゴ)・オオカワイチゴ (クマイチゴ)・アサドリイチゴ (アキグミ)・カンイチゴ (フユイチゴ)・カンスイチゴ (ナツハゼ)・ネズミノタワラ (ツルリンドウ)・マツガンビ (マツブサ)・ホンガンビ (ギョウジャノミズ)

(2) 民間薬 4種類

センブリ・ミコシグサ (ゲンノショウコ)・イヌノヘグサ (ドクダミ)・テンポナシ (ケンポナシ)

(3) 神社・寺・祭用 7種類

フクラシ (ソヨゴ)・サカキ (ヒサカキ)・ハナノキ (?)・シキビ (シキミ)・ウメモドキ・スギ・マツ (アカマツ)

前者は、蒜山地方で標準的な家族の例である。それに対して後者は、帝釈一帯でも特にこの方面に詳しい嬭で、短かい調査期間に、150種以上の植物方言を教えていただいた。ただ、農具・建材・繊維については、短期間の為調べることができなかった。

山村は過去幾度かの<ガシン> (飢饉のこと) を耐え抜き、多くの自然についての知識を伝承し、野生植物の新たな利用法を開発してきた。もちろんそれは個々の植物について、採取時期・生育場所・食法あるいは利用法といった知識が互いに結びついたものである。現在使用されなくなったものについては第Ⅱ章で述べるが、栗谷の家族の例について、以下具体的に内容を述べて

みたい。

惣菜においては、菌類が11種類で最も多い。菌類は、蒜山地方の植物方言として少なくとも29種類は採集されており、約1/3に減じていることになる。＜ガシンカワタケ、ホウネンシメジ＞とは山村の諺で、飢饉にはカワタケ（コウタケ）がよく育ち、稲の豊年にはシメジがよく採れることを示したものである。このカワタケ・シメジが菌類としては最も珍重されている。菌類はその生育場所を＜シロ＞と呼ばれ、代々親から子へ伝承されてきた。タニワタリ（？）という菌類は、その＜シロ＞の状態から名づけられたもので、生育場所が一本の帯になって谷に生える状態を示している。一方、カワタケ（コウタケ）・シバカツギ（ショウゲンジ他）の＜シロ＞は円形であるという。粟谷の50代以上の人はたいてい自分の＜シロ＞として、このような＜シロ＞を5～6個は持っており、人には滅多に教えない。この食用にされている11種類の菌類は、採取が多量で簡単・美味・有毒無毒の判定がたやすいもの、といった条件を持っている。しかし利用される菌類の減少は、植林による自然環境の変化と、有毒無毒の判定ができ多くの種を同定できる故老が少なくなったという理由も考えられる。一方反対に、自然環境の変化でふえたものの一つにスギミミ or スギタケ（スギヒラタケ）があげられる。スギの切株に九月末頃でる菌であるが、70代の人に聞いてみると、昔はあまりなく、食べることも少なかったということである。このことは、戦後における植林のすさまじさを物語っている。

ウド・ゼンマイ・ワラビ・テテッポ（フキ）・カケゼリ（ダケゼリ）・ヤブウド（ハナウド）などの惣菜は、現在でも大量に採取されている。これらは、最近商品価値が出てきたので、自家消費としてよりもむしろ商品として売りに出す傾向がある。ウド・ヤブウド（ハナウド）は、庭先に植えられて半栽培の形式をとっており、特にウドは商品価値も高いためか、茎が青くならないよう根本を＜スクモ＞（靱殻）で被うなど、かなり手をかけている。それに反して、ママコナ（ハナイカダ）のように春先に葉を採取し、乾燥保存し、冬期湯にもどして使用するような手間がかかったり量の少ないものは利用されなくなってしまった。保存食として粟谷のどの家にもたいていあるのは、ウド・ゼンマイ・ワラビの塩漬、テテッポ（フキ）の味噌漬ぐらいのものである。ただこの家族には現在82才になる媼がいて、ケンザキホウコウ（ヤマボクチ）・ヨモギ・チチボウコウ（ホオコグサ）を春先採取して乾燥保存している。これは＜シロミテ＞（出植後の祝事）の餅搗に湯にもどして米と一緒に搗込み、餅の粘性を高めるのに使われるもので、でき上がった餅は＜ホウコウモチ＞と称され、＜カブウチ＞（血縁集団）に配られる。しかし粟谷約40戸のうちで＜ホウコウモチ＞を作るのはわずか2～3戸で、もはやこれも消滅するのは時間の問題であろう。これと同じような状態にあるのは＜ミヤマノカオリ＞と称される自家製の茶で、細々と余命を保っている。これはアケビ（アケビ・ゴヨウアケビが良く、ミツバアケビは苦いといって嫌う）・コウカイチャ（カワラケツメイ）・フジ（ノダフジ）・アサドリ（アキグミ）の若い新芽と葉を陰干しにして、一緒に混ぜ煎じたものである。フジ・アケビ・コウカイチャは、特に単独でも用いられ、それぞれ＜フジチャ＞・＜アケビチャ＞・＜コウカイチャ＞と称されている。以上、食物の中から惣菜・保存食・茶について簡単に説明してみた。

(d)項は、山仕事の休みに、また子供が遊びに採って食べるようなものが多く、したがって食法も、生であるいは焼いて食べるといった簡単なもので、労力をかけて採集したりするものはない。ただ近年、果実酒が粟谷で流行し、そのため、ヤマブドウ・サザンキョウ（バタンキョウ）・ウシブタイ（ガマズミ）・マタタビなどの実が好んで採られるようである。

次に、民間薬について述べてみよう。調査期間中、粟谷の多くの家で薬研と薬箆筒を実見し、一世代前まで使用していた家があるのを聞くに及んで、数多くの民間薬を予想したのであるが、予想に反して、採集された民間薬は数少ない。更に民間薬になる植物の名や、何の病気に効果があるかということまでは知っていても、薬の製法を全く知らないというものが実に多く、これらの知識は他から入ってきたものが多いと思われる。実際によく使われるのはミコシグサ（ゲンノショウコ）・ジュウヤク（ドクダミ）・センブリの三つである。他にキワダ（キハダ）・クロモジ・チドメグサなどが村の人たちからよく耳にする植物である。このうちキワダの樹皮は飼牛と人間の整腸剤として珍重されているが、クロモジ・チドメグサについては実際には使用していないようである。なお、チドメグサについては、止血する時に唱えたという次のような呪文が残っていた。『天笠のリョウシャ（？）の河の河上に七里続いた岩の苔、その苔取ってこの切り傷につける。アピラウンケンソワカ、アピラウンケンソワカ』しかしこれは、チドメグサを薬として使用するというより、何か他の信仰と結びついたものと考えられる。

民間薬は漢方などの影響もあって、その実体は不明確な点が多い。それに比べて、神社・寺・祭用に使われる植物、農具・建材・繊維・籠に使われる植物は、親から子へ、世代から次の世代へ伝承されて来たものが多い。神社・寺・祭用植物については第Ⅱ章で述べるとして、ここで農具などへの野生植物の利用の様子をみてみよう。野生植物は農耕生活上の民具に今でも多少利用されている。以下、羅列してみると、ウツキ（ヤマボウシ）は鎌・鉈・斧の柄として使い、カシホシ（ネジキ）は稲刈後の稲を乾燥する＜ハデギ＞（架木）として最も秀れている。摺粉木はサンショウの木で作られ、俵はハウノキで作る。サンショウは木の硬度が大であり、ハウノキは柔かなことによっている。ヤマカゲ（シナノキ）の樹皮を春剥いで、小川や池に三ヶ月程つけた後、陰干しにすると非常に強い繊維がとれる。この繊維から＜フクロセコ＞（鎌・鉈を入れる袋）を作ったり、縄を作る。農家の納屋に入るとこれを使っているものが非常に多い。また牛の鼻繰りには、＜ハシレナイ＞（裂けない）ことからガヤ（イヌガヤ）を使ったり、木を＜ソクウ＞（結束する）のにウシノフタイ（ネジキ）・リョウボウ（リョウブ）の＜スバイ＞（今年伸びた枝）、クズボウラ（クズ）、フジカズラ（ノダフジ）を使う。農耕生活上の民具は以上のようなものであるが、建材として使われるのは、スギ・マツ（アカマツ）・ヒノキが圧倒的で野生植物は少ない。家の土台木として、クリ・マツ（アカマツ）、廊下にケヤキ、サクラ（ヤマザクラ）、床柱・手摺にサルスベリ（リョウブ and ナツツバキ）、床框にケヤキ・エンズイ（エンジュ）といったものが主なものである。

以上が、粟谷における現在の野生植物の利用の概観である。近郊農村や都市生活に較べ、まだ随分多くの野生植物を自らの手で調達しているのが理解できる。しかしそれでも、過去の山村と

較べれば実に多くのものを使用しなくなっている。次のII章において、過去の状態を中心に展開してみる。

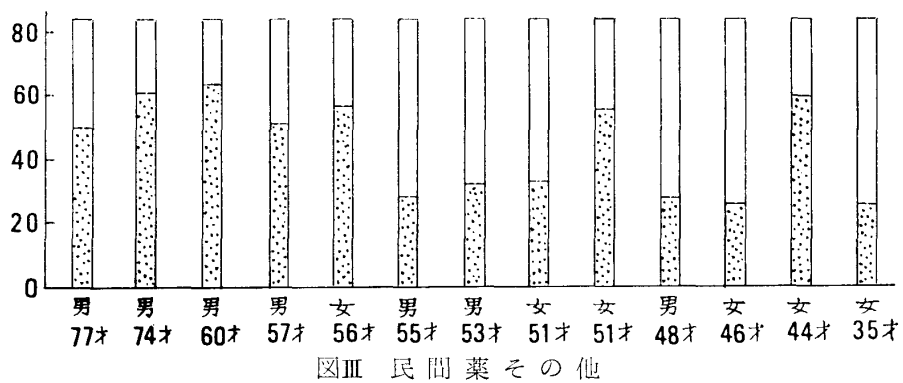
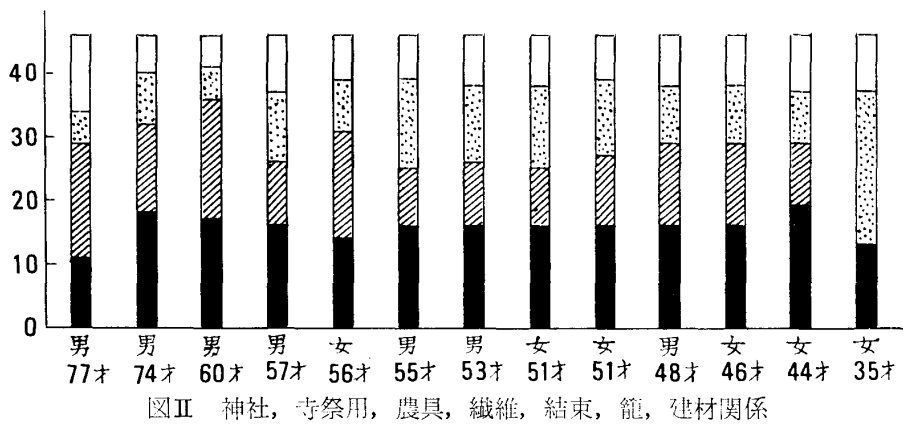
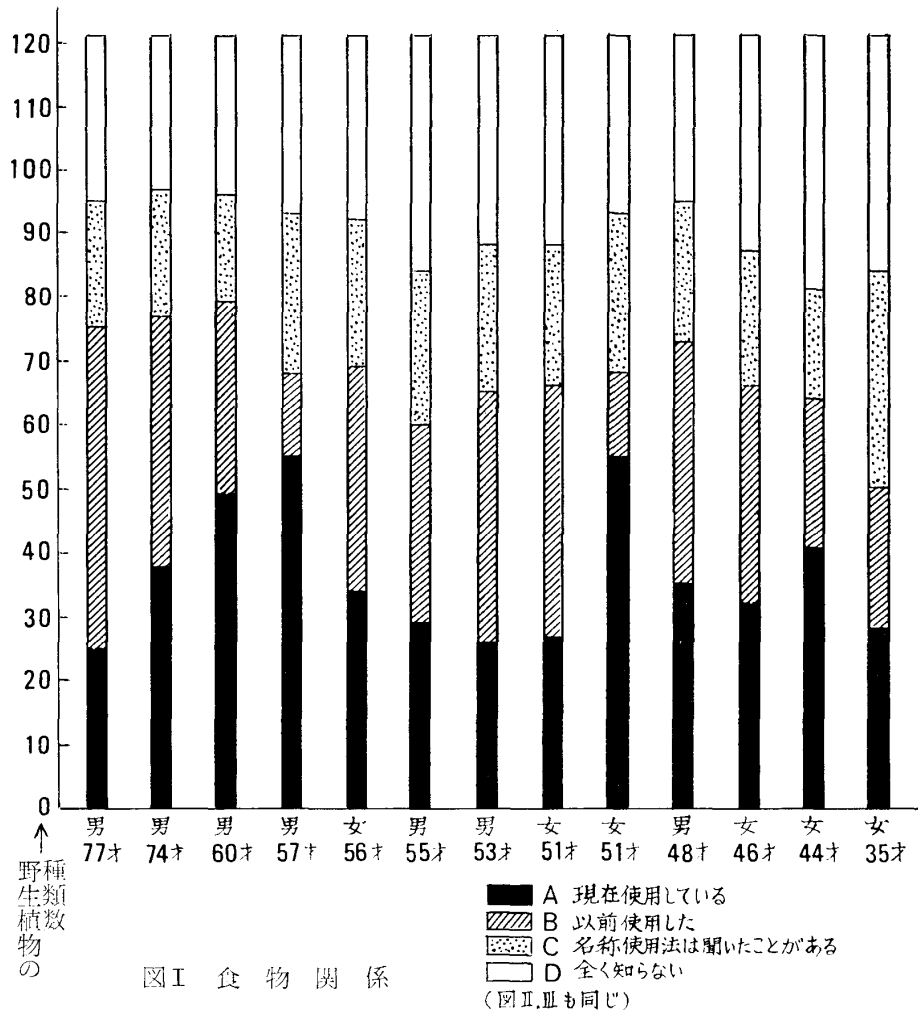
II 章 年代別にみた自然環境への依存度の相異

前章では、粟谷の現在の野生植物の利用の概観を生活の各方面に分類して述べた。それでは、現在の粟谷を構成している約40戸が、自然への依存をどのように変化させてきたのだろうか？社会構造の変化や生活構造の変化が、山村民と自然との対応関係を変遷させたに違いない。そこで、実用価値を既に失った野生植物の利用の実態を調査するため、表Iにみられる調査表を作成

表 I

植物方言	和 名	A (現在, 使用) (している)	B (以前, 使用) (した)	C (名称, 使用法は聞 いたことがある)	D (全く知 らない)	備 考
センドシバ	ヒサカキ	○				
フクラシ	ソヨゴ	○				
クロモジ	クロモジ		○			餅花の木として
ユズリハ	ユズリハ			○		

した。食物関係121種、民間薬73種、農具・繊維・結束・籠・建材36種、神社・寺・祭用9種、炭・薪19種、その他56種の植物に分類し、粟谷の約40戸の家から年代別に13人を任意に選び個別に調査した。この調査は、昭和48年9月に行った。調査対象の人々は全て農業・牧畜を生業としている。表IのA項は現在から3年前までの期間に利用したことがあるというものである。B項は4年以上前に使用したり、子供の時利用したことがあるというもので、C項は、名称・使用法は聞いたことはあるが、その種を確実に同定できるかどうか不明確なものである。C項における植物は、年代の下降に従って同定できる種類数は減少していくことが、彼らとの対話の中で感じられた。この調査結果を基に、食物関係については図Iに、神社・寺・祭用・農具・建材・繊維・籠・結束は図IIに表した。調査した植物の中で「その他」として分類したものは、生活上利用されることはないが身近にあり親しみを持たれているものとか、田の草として嫌われている植物である。また、民間薬として使用されるのが前章で述べたようにわずか6種であるので、その他と民間薬を合わせて、C・D項の二項で調査した。その結果を図示したのが図IIIである。なお、炭・薪はかつて山村の重要な現金収入の道であったが、現在の粟谷では炭焼をする人はいない。これについてはこの章の最後に述べる。図I・IIにおいてA・B二項を合わせた種類数が、彼らが確実にそれらの野生植物を同定できることを表している。そしてその種類数は図I・IIにおいて、年代が若くなると共に減少していく傾向が読みとれる。更に、B項においてそれらの植物を同定はできるが、料理法やそれら植物に伴う習俗を確実に習得しているものが年代の下降に伴って減少していくことを考え合わせれば、忘れられていく野生植物がどんどん増していく状態がわかる。前章においてA項を述べたので、この章はB・C項を中心に吟味してみる。



食物関係の植物で、B・C項に属するものが非常に多いことは、山村の食生活が以前と大幅に変化したことを明確に示している。特にC項に属する野生植物は、いわゆる飢饉の備荒食として知られている植物が多く、30代から60代では料理法・処理法を全く知らない人が多い。クズボウラ（クズ）、シズラ（ワラビ）の根を掘って澱粉をとった人は既におらず、わずかに70代の人がある。ヤーヤー（ウバユリ）の根から澱粉を採ったことを記憶しているにすぎない。ヤーヤーは、五月頃葉のまだあまり出ていない鱗茎のよく発達したオンナヤーヤーと彼らが呼ぶものを採取し、唐臼で搗くか、石の上で叩いた後、桶の中に入れて漉す。その水を何回もとり返して上澄を捨て、最後に沈殿したものを乾燥することにより、カタクリを採った。クズボウラやシズラも同様に行ったようである。ただこの二つは、よく根の発達したものを見つけることがむずかしく、根を掘るのにも大変な努力を要するものだったようである。採取する時期は<コナシ>（稲の脱穀）が終る秋から冬にかけてであった。澱粉をとる備荒食として根の他に堅果があるが、代表的なトチノキ、ヒビ（カヤ）の実の灰汁抜き技術や澱粉採取の方法は全く伝承が無い。むしろ、ヒビ（カヤ）、ギャ（イヌギャ）の実から油を採ったことを先代から聞いたという人が2~3人いた。リョウボウ（リョウブ）・クサギナ（クサギ）・オコギ（ウコギ）の若葉を摘み、乾燥保存し、カチ飯の材料にした話やササゴ（笹の実）のなった年にそれを採取して蔵に貯蔵しておき、飢饉に備えたことなども既に昔話となっている。こういったことが日常茶飯事として行われていた時代は、塩や砂糖は貴重品であったのだろう。シオノキ（ヌルデ）の木の皮を嘗めて塩分をとったとか、タクワン漬に甘味を出すためにアマチャ（ヤマアジサイ）の<ブチ>（茎のこと）を土用の頃採って来て、柿の皮の乾燥したのと一緒に漬けたとかいう話を60~70代の人達がしてくれた。このように飢饉の備荒食は既に遠い過去のものとなってしまったが、現在生活している粟谷の人たちでも既に多くのものを食物として利用しなくなっている。図IのB項に属する野生植物がそれにあたり、その理由はさまざまである。例えば、旧盆15日に必ずヒー（スベリヒユ）・アカザのお菜を作って仏様に上げ、家族も皆食べるといった習俗や、旧8月15日をイモ名月と称し、ズイキイモ（サトイモ）・アカバチ（キイロスズメバチ）のハチノコ・カワタケ（コウタケ）を入れた炊き込み御飯を作って食べる風習がもはや行われなくなって、そういった習俗に伴う植物利用は消えていこうとしている。また<ユルリ>（囲炉裏）が無くなり、アカバチの子やシオデをフキの葉に包み、塩をかけ熱灰に入れて焼く食べ方も当然なくなっていった。食用とされる菌類が大幅に減少したことは述べたが、同様なことは他の惣菜についても起っており、田の畔に多いアサツキ・シンザイ（スイバ）・タビラコ・ホイトネブカ（ノビル）などは現在では惣菜として食卓に上らない。子供の遊びにも変化が起り、かつて遊び道具や菓子類の無かった子供たちは、山でナツグリ（ツノハシバミ）・ウラジロ（ウラジロノキ）・ウツキ（ヤマボウシ）・ギャ（イヌギャ）・クルミ（オニグルミ）・シャジナッポウ（イタドリ）・マツガブ（マツブサ）などを採って食べた老人たちは述懐する。

かつての山村が、一本の木・一本の草と微妙に結びつき、それなくしては彼らの農耕生活が成立し得なかったということは、神社・寺・祭用、農具・繊維・籠・結束・建材における野生植物

の利用体系をみてみるとはっきりする。このことは、彼らが如何に鋭く植物のもつ形質の中から生活に役立つ形質を抽出し、うまく農耕生活の民具に使いこなしていたかということであり、合理的で且つ繊細な自然利用であったといえる。現在、神社・寺・祭用として用いられる植物は、正月の飾り用のマツ（アカマツ）・スギ、歳神の神飾用のフクラシ（ソヨゴ）、盆・彼岸に墓前に供えられるボニバナ（オミナエシ）・ミソバナ（ミソハギ）・ハナエダ（シキミ）などであり、他にサカキの代用としてセンドシバ（ヒサカキ）が使われる程度で非常に数が減っている。今は忘れられている年中行事にも、ずいぶん多く野生植物が利用されていた。正月前の12月13日を＜キシクサン＞と呼び、どの家でもシラハシ（ウリハダカエデ）で正月用の箸を作る行事があったし、＜オオドシ＞（大晦日）にはミノサイジョウやフクナリという品種の柿を＜年取柿＞と称して必ず食べたものである。11月の初め頃、この柿を採り蔵に自然状態で放置しておく＜オオドシ＞には渋がとれて食べられるようになっており、これを＜ムシ柿＞と呼んでいた。正月になればどの家でも餅花を作ったものだが、この餅を飾る木を餅花木といい、クロモジあるいはウツキ（ヤマボウシ）の＜スイ＞（今年伸びた枝）を使った。また正月の期間中、竈で燃す薪はヌリダ（ヌルデ）でなければならないとされ、正月前この木が多量に準備された。5月には＜コト＞と呼ばれる小祭があり災難除の神を祭ったらしいが、詳細は既にわからなくなっている。この小祭には＜ヒトリゴトはするものではない＞と云って、家内中の者が一升枡に半分赤飯を入れ、他半分にズイキイモ（サトイモ）・ゴボウのおかずを入れて床の間に供える。そして家内中の箸を新しくハコヤナギ（ヤマナラシ）で作り、その箸で一升枡から赤飯とおかずをとって各々藁苞を作り、山へ持って行って木にかけるか、家の近くの柿の木にぶらさげる。他に小祭として＜ロックウサン＞という＜ユルリ＞（囲炉裏）の神があり、これにはスギの小枝を供え＜コウシンサン＞という神には若竹を供えるという具合に、性格の異なる神に対応して供え物も使用される植物も微妙に使い分けていたようだ。また子供の＜タジョウ＞（誕生日）に、ヤマオ（カラムシ）で＜ムシオ＞（縄状のもの？）を作り、これを背にかけさせ、長生を願った習俗も今では行わない。

こういった信仰と結びついた行事にも細かい配慮を配った山村民は、当然生産道具や生活用具にも分類能力を発揮し、野生植物を数多く利用していた。ヤマカゲ（シナノキ）・ヤマオ（カラムシ）・ヒロレ（カンスゲ）・ボウリョウグサ（？）・ノボセ（チガヤ）・ガマといったものから繊維がとられ、それぞれの用途に応じて多くの民具が作られた。ヤマカゲは極めて丈夫であるところから、山仕事に持って行く＜フクロセコ＞、肥料や苗を運ぶ＜肥負籠＞、＜キオイコ＞（背負子）の下につける＜ドウマル＞など幅広く使われる。ヒロレは農作業用のワラ蓑に対して、訪問用の上等な＜ボウリョウミノ＞と呼ばれる蓑に編まれる。二百十日位の時期にヒロレの株を根から引き抜くと簡単に抜けるのでこれを川につけた後、陰干しにして材料を作っていた。しかもこれには、この時期以外にとってはならないというタブーが伴っていた。ガマも重要な民具によく使用され、栗拾いや茸採りに使う＜タメッコ＞・＜ガマコシゴ＞などという籠に編まれた。ヤマカゲ・ヒロレ・ボウリョウは繊維として最も広く活用され、他にもたくさんの用途があったも

のと思われる。今よりもっと自給自足的な生活をしていた過去の山村では、生活の微細な部分にも自然物の利用が入り込んでいた。そういったものの代表的なものをあげてみよう。ノボセ（チガヤ）からとった繊維は、あまり丈夫でないので三和土の草履にしていた。農家の庭の生垣をクロモジ・グイボタン（？）で作り、訪問用の下駄をコウダ（サワグルミ）で自ら削り、煙管はハシレウツギ（ウツギ）をうまく利用し、孫のお手玉はチナイ（エゴノキ）の実を入れてあげるといふ繊細さは、山村ならではのことであった。

このように自ら調達する生活から、既製品を購入する生活に変化してきたのは何も山村だけとは限らないが、現在最も動揺しているのは山村であると云っても過言ではない。脱穀機の普及する以前はトウスで脱穀し、その刃をエンズイ（エンジュ）・カネマキ（クヌギ）で作っていたのが、農業の全ての面で機械化が始まり既製品が増え始めた。ケヤキの白が石臼に変わり、更に機械化した。農家の屋根もカヤから＜コワブキ＞（クリノキを上等とし、スギのアカメを下等とする）。そしてトタン屋根に変わって来た。粟谷の人たちも、かつては現金収入の道としてボカ（コシアブラ and タカノツメ）を木挽し、経木の材料として売ったり、漁業用の網を丈夫にする渋をとるためガゴウマキ（カシワ）の鬼皮を採集し、コルクの材料であるアベマキの皮も剥いで売っていた。

更に、かつて最も重要な現金収入の道であり、山村が変化せざるを得なかった象徴的な出来事は、炭焼の廃止であった。粟谷ではかつてどの家も炭を焼いていた。主に家庭用の黒炭が主体で、カネマキ（クヌギ）・ミズマキ（ミズナラ）・ナラマキ（コナラ）・アベマキの木が材料であった。ミズキ・サルスベリ（ナツツバキ）・サクラ（ヤマザクラ）・ミズメ・チナイ（エゴノキ）・イタヤ（イタヤカエデ）・エンズイ（エンジュ）・カシホシ（ネジキ）なども焼き、これらは雑炭と称され価格も安かった。また特殊な炭として、料理屋などで使われる上等な白炭、漆器の地磨き用のホオノキ炭、鍛冶用の炭としてクリ・ヌリダ（ヌルデ）の小炭も少々焼いていた。これらが昭和30年以後、プロパンガス等のいわゆる燃料革命といわれる化学系燃料の普及により、急激に消滅した。

以上、B項に属する野生植物の利用体系をみてきた。B項に属する植物の中に、かつての山村を成立させるためのなくてはならない重要な植物が多数入っていることに注目しなければならない。炭焼の廃止を契機として、粟谷のような山村が自然との共生的関係を断ち切り始めたのではないかと思わせる程、B項に属する植物は多い。農耕生活に何の役にも立たない図Ⅲに示した植物に対する年代別の変化が、そのことを裏付けているように思われる。この図に見られるとおり、50代を境としてそれより上の年令と下の年令の間に急激な変化があり、野生植物に対する山村民の対応に大きな相異のあることを示している。現在の山村は、村をとりまく自然環境をもはやあまり重要視しない。それどころかむしろ敵対的な関係に変化していきこうとしているような気がする。それとは反対にかつての山村は、何の役にも立たない野草や雑木に対しても積極的に分類し、識別していなければ、その生活が成り立たなかったといえる。I章・II章において、自然利用の変化を媒介にして現在と過去の山村の変貌を把握することができた、III章においては、自然を積

極的に分類し、自然と共生的関係を保っていた山村民の自然認識について追求したい。

III 章 自然認識について — Folktaxonomy の立場から —

I・II章において、現在及び過去の山村民の野生植物の利用をみてきた。そこでは多種多様な植物が生活に入り込み、各植物の性質と各民具の性質に、見事な対応関係がみられた。この対応関係は時代が過ぎれば過ぎ程、明確になる。例えば、粟谷の人はカンジキの材料として山へチナイ（エゴノキ）・コウカイ（ネムノキ）をとりに行った。これらは乾燥すれば、非常に軽く丈夫で曲げやすい性質を持っている。この性質をうまく使いカンジキを作った。そのカンジキも数種類の形式があったようで、冬の山仕事用・ウサギ狩用などもっと細かい区別に応じて、チナイ・コウカイ・竹も使い分けられていたに違いない。それは蓑についても同様で、島根県飯石郡頓原町で蓑の材料としてクサ（カンスゲ）・ワラ・シュロ・カネリ（ヤマカゲ）・モクゲ（ムクゲ）と五種の植物が採集されており、帝釈では蓑の名称も、むくげみの・ひろれみの・うまみの（材料不明）・ままみの（材料不明）の四種が採集されている。粟谷では少なくとも、ワラ・ヒロレ（カンスゲ）・ポウリョウグサ（？）の三種類で蓑は作られた。＜ヒロレポウリョウ＞と呼ばれる蓑は、最上等の蓑として訪問用に使われた。おそらく蓑にも、雪の日と雨の日に使うもの・猟用と農耕用・普段用と訪問用などそれぞれの用途によって繊細な区別があったのであろう。このように、植物の持つ性質の中に生活に役立つ実用的価値を見出し、巧みに自然を生活にとり込む背景には、生活に即した自然認識が存在していても不思議ではない。Field Note に蓄積した、山村の人々から得た自然についての知識を整理してみると、おぼろげながら彼らの自然に対する考え方が想像できる。

粟谷の人々が植物界をどのように分類しているのかを述べる前に、彼らが自然について語る時に使われる用語を整理してみる。これは彼らの分類基準ともなっているもので、木と草に分け、その形態の特殊な用語を示したのが表II・IIIである。わかりにくい言葉を説明しておく、＜エボ＞とは木の枝の先、＜スパイ＞は今年伸びた若い枝、＜エビル＞とはアケビの実のように口をあけて熟すことを示す。＜ゴンボネ＞は太い主根を指し、＜ヒコネ＞は地上近くを横に走る側根

表 II

実	木の形態についての名称				
	ドングリ	イチゴ	クルミ	エビルもの	
幹 枝	モト	エボ(ウラ)	スパイ	シバ	チチ
木 目	タマモク	チヂミモク	アカメ		
樹 皮	オニカワ (アラカワ)	アマカワ アマハダ	ズイ	シンコ	
生え方	株生	一本生			
木の形状	マキ	トキワギ	カズラ	雑木	灌木

を指す。＜ホテメ＞は伐採後、切株から出る芽のことである。＜ブチ＞は一般に茎のことを云い、＜グイ＞は棘のことでサルトリイバラなどの棘を指し、＜イガ＞はイラクサの刺毛の

表 III

草の形態についての名称					
実	イチゴ	イトロベ ハサミ ジイババ (帝釈)			
葉	ハダレ	シズラ	新芽	ホテメ	
茎	ブチ	グイ	イガ		
根	ゴンボネ	ヒコネ ヤナギネ	ヒゲネ	ネブカ イモ	
草の形状	アオモン	タノクサ	ミズクサ	シバクサ	カズラ

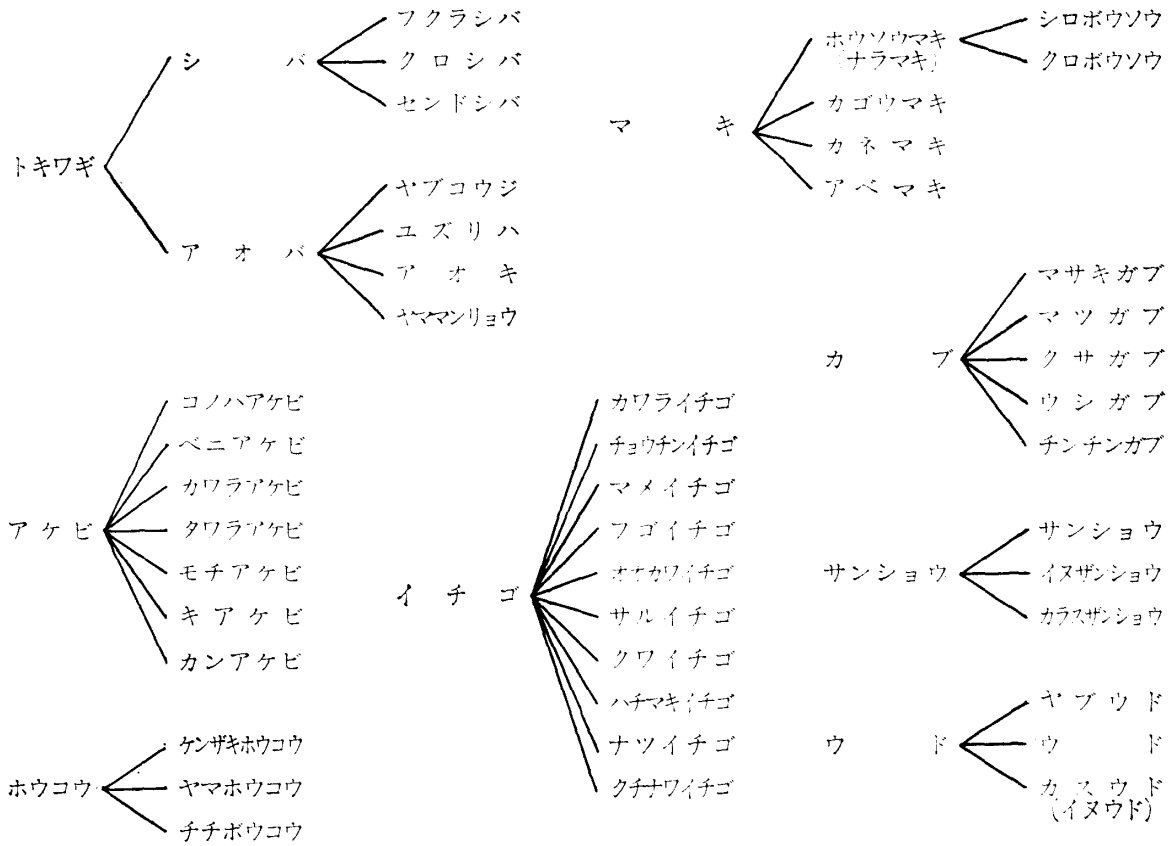
ようなものを指す。一般的に葉を<ハダレ>と称し、シダ植物の成長葉を<シズラ>という。<イトロベ>・<ハサミ>は実が人の衣服に付着する植物の総称で、帝釈では<ジイババ>と呼んでいた。

II章の調査表に答えてくれた

人のうち、同定できる植物の最も多い人が197種であり、その内何らかの形で農耕生活の中にとりこまれている植物が135種、実に70%近くがその中に入る。つまり彼らは農耕生活の延長上に自然と接触しているのであって、決して純粋な意味での自然をトータルに把握した自然観を持っているのではない。従って彼らにとっての自然とは、実用的価値を持ち、分類する必要のある自然を指すのである。換言すれば、同定できる植物の数がその自然の実体であるといつてよい。このような価値基準をもつ山村民は、植物界を実際どのように分類しているのだろうか。

粟谷では植物界を大きく、キ・クサ・カズラ・タケ(菌)の四つに分類している人が最も多い。しかし、中には、タケ・ササは別に分け、五つに分類する人もいる。彼らの分類に従えば、ワラビ・ゼンマイなどのシダ植物はクサに入る。しかしこの分類はそれ程明確なものではなく、例えばクズボウラ(クズ)は何に入るかと聞くとクサのカズラと答え、ジイノドウラン(サルナシ)は何に入るかと聞くと木のカズラと答える人もいて、漠然としたものである。分類の第1のランクに較べ、第2のランクはより明確である。表II・IIIの木と草の形状としてまとめたものがそれにあたる。この分類は山村の生活様式を反映していて、粟谷ではマキとはカネマキ(クヌギ)・ミズマキ(ミズナラ)・ナラマキ(コナラ and ナラガシワ)・アベマキ・ガゴウマキ(カシワ)の6種類に対してしか決して使わない名称であるが、これらは炭に焼かれ、それも上等な炭という意味を暗に含んでいる。トキワギは常緑樹を指すのであるが、これは全ての常緑樹を示すというより、むしろ神飾用の木という意味に近く、この中にフクラシ(ソヨゴ)・センドシバ(ヒサカキ)・ユズリハなど重要な神飾用植物が入る。アオモノは春に出る山菜の総称であり、タノクサは農耕地に生える厄介な雑草で、ヒジワイ(メヒシバ)・マスグサ(カヤツリグサ類)・カマツカ(ツユクサ)などがその代表である。大きな分類はこの二段の構造を持っており、それ以下は類似種として認識されている多くの小さなグループがある。これは方言名の命名法から推察できるもので、例えばマサキガブ(ギョウジャノミズ)・マツガブ(マツブサ)・クサガブ(?)・ウシガブ(ノブドウ)・チンチンガブ(カミエビ)の五種類は、彼らが類似種として認識していることを示している。彼らが類似を基準に植物を分類している例を表IVにまとめてみた。この表IVにおいて、生物学的な意味での種は85種類である。従って粟谷では最も多く植物を同定できる人が197種、少ない人で101種だから約43%~84%の植物がこのような形で分類されている。しかもこの85種類がほとんど山村生活に何らかの寄与をしている植物であるから、彼らは植物の持つ形質の中

表 IV 類似種の分類実例



オオカミグイ ↔ メグログイ
 タラ ↔ グイグラ
 クロモンジ ↔ シロモンジ
 アオブナ ↔ アカブナ
 イクチ ↔ メクライクチ
 カワタケ ↔ ウシガワタケ
 チナイ ↔ オオバチナイ
 重いミズキ ↔ 軽いミズキ
 コウカイ ↔ コウカイチャ
 シンザイ ↔ クチナワシンザイ
 アカダシ ↔ アオダシ
 オオシバカツギ ↔ コシバカツギ
 フジ ↔ キフジ
 シバグリ ↔ ナツグリ
 オトコヤーヤー ↔ オンナヤーヤー
 オトコゼンマイ ↔ オンナゼンマイ

オトコオ ↔ オンナオ
 ズベラビー ↔ ヒー
 ケヤキ ↔ ネリケヤキ
 カヤ ↔ ノガヤ
 ウシノフタイ ↔ ウマノフタイ

栽培植物 ↔ 野性植物
 ナス ↔ ヤマナスビ
 ユリ ↔ ヤマユリ
 ラン ↔ ヤマラン
 ワ → ヤマワ
 オ → ヤマオ
 コンニャク ↔ ヤマゴンニャク
 セリ ↔ カケゼリ
 ネブカ ↔ ホイトネブカ
 ブドウ ↔ ヤマブドウ

で生活に役立つ形質の類似性を基準に植物界を分類しているといっても過言ではない。そのことをよく表現しているのが、オトコヤーヤー・オンナヤーヤーの区別、あるいはオトコゼンマイ・オンナゼンマイの区別である。両者とも生物学的には一種であり、しかも雌雄異株ではない。これらはウバユリ・ゼンマイのことであるが、この区別は食べることができるかできないかという点が基準であって、前者ウバユリは鱗茎のよく発達したものをオンナヤーヤーと称し、葉が大きくて鱗茎が発達しておらず採集されないのがオトコヤーヤーなのである。後者ゼンマイは、実葉をオンナゼンマイといって好んで採集され、孢子葉をオトコゼンマイと称し嫌われる。また、接頭語にイヌ・カラス・ウシ・ヘビなどの動物の名をつけたり、オトコをつけて食べられない植物、あるいは役に立たない植物を表わすことは全国的によく知られていることである。実用的価値を基準におくのであるから、生物学的な種以上に分類することもできるわけで、粟谷にはミツバアケビ・アケビ・ムベの三種類のアケビがあるが、彼らはの色・形・味によって7種類に分類している。野生植物とはいいがたいが、渋柿なども非常にはっきり品種を区別しており、ヤマガキ・オオゲス・コゲス・ミノサイジョウ・フクナリ・ハッキリ・ヨネガキ・ヤハイガキなどがあり、それぞれ渋抜きの方法も異っている。ちなみに渋抜き技術をあげれば、(1)温湯に合わせる。(2)焼酎漬。(3)塩漬。(4)干柿。(5)焼いて抜く。(6)ムシ柿(Ⅱ章で参照)があり、品種に応じて適当なものを選んでいく。反対に、生物学的な種にまでいたらないものもたくさんあって、ボカといえどコシアブラとタカノツメの両方を指すような場合もある。これは経木の材料として全く同じ価値を持っているので、分類していないのかもしれない。ウジゴロシはテンナンショウの仲間を指し、この名は昔、便所のウジを殺すのにこれを採って来て放り込んでいたことからついた。テンナンショウの仲間なら、どれでも殺虫能力を持っているので分類する必要がないのであろう。イットロベイは実が衣服に付着する植物全てであるし、ボニバナは墓前に供える植物として、オミナエシ・オトコエシ・ヒヨドリバナなどを含んでいる。菌類については最も山村民の性格を表しており、名称のあるものはほとんど食用菌であり、他は全てドクダケと考えている。ただ食用菌に似ているものを区別するため<ニタリ>という表現を用いている。“イッポンシメジ(?)には三種類の<ニタリ>がある”という話は菌類に詳しい村人に聞いたものだが、有毒菌類についてはこんな分類しかない。この表Ⅳに表わされている命名法は山村民がそれらの植物のどの部分に着目しているのかを卒直に表現している。栽培植物から名を転用して、野生植物に名称を与えていることから端的に示されているように、よく知っている植物の形質を自然の中に求め、どんどん彼らの生活領域にとり込み名称を与えてきた長い努力の跡がこの表に示されており、隠された山村の歴史とも云えるであろう。野生植物に名称を与えるということは、その植物が彼らの生活の中で果たす役割の定まったことを示しており、200種に及ぶ植物を同定できるということは、如何に山村が自然との調和を高度に保って来たかということを示しているのである。しかもなおかつ、利用する野生植物を単に自然の中に探し求め採集しに行くだけでなく、それらを生活領域の中にまで持ち込み、積極的に保護し、栽培育成の努力をして来たのである。ガマ・ムクゲ・ヤマカゲ(シナノキ)・ヤブウド(ハナウド)・ウド・アサドリイチゴ(アキグミ)・マメイチゴ

(ウグイスカグラ)・コウカイ:(ネムノキ)・サンショウ・クルミ(オニグルミ)・トガ(イチイ)・ワラビ・ゼンマイ・カヤ(ススキ)・ハナエダ(シキミ)・ミソバナ(ミソハギ)・ワサビなどは野生植物というより、人間の手によって保護されていたり、人家近くに植栽されているものの方が多い。かつては、トチノキ・ウルシ・コウゾ・ヒコレ(カンスゲ)なども保護されて、伐採したり乱獲はせず適度に利用していたようだ。彼らは利用価値を見い出している野生植物を、何時・どこへ採りに行けばよいかをことごとく知っていて、自然の生産力をうまく生活様式の中にとり込み、自然と共生的関係を保ってきたのである。

この生活様式に即して自然を分類することは、何も野生植物だけに限らず、山の地形名の区分にも表われている。ミヤマ(ブナ林を主とする落葉広葉樹林地)・タカツongo(山の頂上附近)・ソネ(尾根)・タワ(山の鞍部)・ソウリ(もと焼畑地帯で今は草刈場)・ズリ(崖など土壌が露出したところ)・シバヤマ(シバを採る山)・タニ(水の常時流れる谷)・サコ(水の常時流れていない谷の上部の平坦部)・ナル(山の斜面の平坦部)・ヒラ(山腹)・シロ(茸の生えそうな場所)・ホキ(溪流岩壁)・ウオキリ(魚が上れないような場所)・ジル(山の中の湿地)・サワ(谷の源頭部)・セト(谷で両側の山がせまって最も細くなった部分)・ハラ(原野)・ナメラ(谷で岩壁が露出して掘れないところ)・クボ(耕地)などの用語の中にも含まれる情報量は実に多く、山村の生活様式全般を理解しなければ、到底その意味がわからない。粟谷40戸をとりまく小さな自然環境に500以上の地名、山の名、谷の名などをつけていることから推測できるように、自給自足的な生活を余儀なくされてきた過去の山村が、よりよい生活のため巧みに自然を利用して来たその背景には、以上に述べたような生活に即した自然認識が存在しているのである。

結 び

ハンザキ(オオサンショウウオ)のような原始的な動物が、中国山地の山村にレリックとして棲息できるのは、極めて不思議なことだとも思って来た。中国山地の山村では<使い川>とって溪流から各農家へ小さな小川を通して、ここで炊事を行っている。上下に網をはって、残飯でヒラメ(アマゴ)・コイなどを飼っている。そうしてそこにはよくアカハライモリとオオサンショウウオが棲みついている。時々採って食べたらしいが、十分な餌と安全な棲家がここで与えられていることを知って、この疑問が氷解したような気がする。いつの頃から使い川が存在していたのかわからないが、それにしても合理的な自然利用だと感心した。山村の生活には無駄ということがほとんどない。糞尿・残飯・粃殻から落葉に至るまで使う。自然の持つ生産力・浄化力を巧みに繰り、高度に自然と調和した生活様式を、野生植物に焦点を合わせて追求してみた。民具・家屋を徹底的に調べれば、野生植物の利用をもっと多く見い出すに違いないが、今後、淡水魚・昆虫・鳥類の方言、採集方法、採集民具などの研究と合わせて努力したい。

最後に調査した粟谷の植物方言名・帝釈の植物方言名と和名・学名とを対照しておいた。

参 考 文 献

- 「新日本植物図鑑」(1966) 牧野富太郎
「原色日本植物図鑑」上中下(1965) 北村四郎他
「原色日本樹木図鑑」(1965) 岡本省吾
「二川村史」(1965) 二川村史刊行会
「蒜山方言植物目録」(1966) 徳山鉄也
「二川の民俗」(1955) 岡山民俗学会編
「美作の民俗」(1958) 和歌森太郎編
「蒜山の自然と人文」(1958) 岡山県編
「植物と民俗」(1969) 倉田悟
「続樹木と方言」(1967) 倉田悟
「日本主要樹木名方言集」(1963) 倉田悟
「食生活の歴史」(1968) 瀬川清子
「民俗学辞典」(1951) 民俗学研究所編

Ethnobotanical Study of Rural Life

Toru Shinohara

植物方言, 和名, 学名 対照表

食物関係植物			
粟谷植物方言	帝釈植物方言	和名	学名
ア イ タ ケ	ア イ タ ケ	ハ ッ タ ケ	<i>Lactarius hatsudake</i> Tanaka
ア カ ザ	ア カ ザ	ア カ ザ	<i>Chenopodium album</i> L. var. <i>centrorubrum</i> Makino
ア ケ ビ	ア ケ ビ	(ミ ツ バ ア ケ ビ ア ケ ビ)	<i>Akebia trifoliata</i> (Thunb.) Koidz. <i>Akebia quinata</i> (Thunb.) Decne.
ア サ ツ キ	ア サ ツ キ	ア サ ツ キ	<i>Allium Schoenoprasum</i> L. var. <i>foliosum</i> Regel
ア サ ド リ	ア サ ド リ イ チ ゴ	ア キ グ ミ	<i>Elaeagnus umbellata</i> Thunb.
(ア タ マ ハ ゲ ハ チ マ キ イ チ ゴ)	(カ ス イ チ ゴ ハ チ マ キ イ チ ゴ)	ナ ツ ハ ゼ	<i>Vaccinium Oldhami</i> Miq.
ア マ ナ	—————	ヤ ブ カ ソ ウ	<i>Hemerocallis fulva</i> L. form. <i>Kwanso</i> (Regel) Kitamura
イ ク チ	—————	ア ミ タ ケ	<i>Suillus bovinus</i> (Fr.) Kuntze
メ ク ラ イ ク チ	—————	?	
ク ズ ボ ウ ラ	ク ズ ソ ボ	ク ズ	<i>Pueraria lobata</i> (Willd) Ohwi
ウ シ ノ フ タ イ	イ ッ シ ョ ウ ノ キ	ガ マ ズ ミ	<i>Viburnum dilatatum</i> Thunb.
ウ ダ ゼ リ	—————	バ イ カ モ	<i>Batrachium nipponicum</i> (Makino) Kitamura var. <i>major</i> (Hara) Kitam.
ウ ツ キ	オ ツ キ	ヤ マ ボ ウ シ	<i>Cornus Kousa</i> Buerg.
ウ ド	ウ ド	ウ ド	<i>Aralia cordata</i> Thunb.
エ ノ キ (ミ)	エ ノ キ (ミ)	エ ノ キ	<i>Celtis sinensis</i> Pers. var. <i>japonica</i> (Planch) Nakai
オ オ カ ワ イ チ ゴ	オ オ カ ワ イ チ ゴ	ク マ イ チ ゴ	<i>Rubus crataegifolius</i> Bunge
ダ イ ダ ラ	ダ イ ダ ラ	ハ リ ギ リ	<i>Kalopanax septemlobus</i> (Thunb.) Koidz.
オ コ ギ	オ コ ギ	ウ コ ギ	<i>Acanthopanax Sieboldianus</i> Makino
(オ ト コ ヤ ヤ オ ン ナ ヤ ヤ)	ヤ ヤ	ウ バ ユ リ	<i>Cardiocrinum cordatum</i> (Thunb.) Makino
カ ガ ミ グ サ	カ ガ ミ グ サ	カ タ バ ミ	<i>Oxalis corniculata</i> L.
カ ケ ゼ リ	カ ケ ゼ リ	ダ ケ ゼ リ	<i>Spuriopimpinella calycina</i> (Maxim.) Kitagawa
チ チ コ バ ナ	—————	ウ ツ ボ グ サ	<i>Prunella vulgaris</i> L. subsp. <i>asiatica</i> (Nakai) Hara
マ サ キ ガ ブ	ホ ソ ガ ソ ビ	ギ ョ ウ ジ ャ ノ ミ ズ	<i>Vitis flexuosa</i> Thunb.
(カ ブ シ メ ジ セ ン ボ ン シ メ ジ)	—————	セ ン ボ ン シ メ ジ	<i>Lyophyllum cinerascens</i> (Konr.) Konr. et Maubl.
ガ ヤ	ガ ヤ	イ ヌ ガ ヤ	<i>Cephalotaxus Harringtonia</i> K. Koch
チ ョ ウ チ ン イ チ ゴ	—————	ス グ リ	<i>Ribes senanense</i> F. Maekawa
カ ワ タ ケ	コ ウ タ ケ	コ ウ タ ケ	<i>Sarcodon aspratus</i> (Berk.) S. Ito
カ ワ ラ イ チ ゴ	ナ ワ シ ロ イ チ ゴ	ナ ワ シ ロ イ チ ゴ	<i>Rubus parvifolius</i> L.
(メ グ ロ グ イ サ ン キ ラ グ イ)	サ ル ト リ イ バ ラ	サ ル ト リ イ バ ラ	<i>Smilax China</i> L.
グ イ ビ イ チ ゴ	—————	ナ ワ シ ロ グ ミ	<i>Elaeagnus pungens</i> Thunb.
ク サ ギ ナ	ク サ ギ ナ	ク サ ギ	<i>Clerodendron trichotomum</i> Thunb.
ク リ タ ケ	—————	マ イ タ ケ	<i>Grifola frondosa</i> S. F. Gray
ク ル ミ	—————	オ ニ グ ル ミ	<i>Juglans mandschurica</i> subs. <i>Sieboldiana</i> (Maxim.) Kitam.

クワイチゴ	ク	ワ	(クマグワ)	Morus alba L. Morus bombycis Koidz.
コウカイチャ	コウカイチャ	カワラケツメイ	カワラケツメイ	Cassia Nomame (Sieb.) Honda
フゴイチゴ	フゴイチゴ	キイチゴ	キイチゴ	Rubus palmatus Thunb.
(サジネンゴ)	サジネンゴ	サジネンゴ	サジネンゴ	Prunus salicina Lindley
サザンキョウ	サザンキョウ	サザンキョウ	サザンキョウ	Zanthoxylum piperitum (Linn.) DC.
サンシヨウ	サンシヨウ	サンシヨウ	サンシヨウ	Actinidia arguta (Sieb. et Zucc.) Planch
ジイノドウラン	マタタビ	サナルナシ	サナルナシ	Pteridium aquilinum (L.) Kuhn var. latiusculum (Desv.) Und.
(シズラビ)	ワラビ	ワラビ	ワラビ	Rozites caperata (Fr.) Karst.
オオシバカツギ	オオシバカツギ	シヨウゲンジ (他)	シヨウゲンジ (他)	Lyophyllum aggregatum (Secr.) Kühner
コシバカツギ	シバカツギ	?	?	Polygonum cuspidatum Sieb. et Zucc.
シメジ	シメジ	ホンシメジ	ホンシメジ	Smilax riparia A. DC.
シャジナツポー	タジツポー	イタドリ	イタドリ	Rumex Acetosa L.
シオデ	シオデ	シオデ	シオデ	Prunus salicina Lindley
シンザイ	シンザイ	スイバ	スイバ	Pleurocybella porrigens (Fr.) Sing.
スウメ	スウメ	スモモ	スモモ	Osmunda japonica Thunb.
(スギヒラケ)	スギヒラケ	スギヒラケ	スギヒラケ	Elatostema umbellatum Blume var. majus Maxim.
スギシメ	スギシメ	スギシメ	スギシメ	Lapsana apogonoides Maxim.
ゼンマイ	ゼンマイ	ゼンマイ	ゼンマイ	Aralia elata (Miq.) Seem.
タキナ	タキナ	ミズナ	ミズナ	Equisetum arvense L.
タビラコ	タビラコ	タビラコ	タビラコ	Petasites japonicus (Sieb. et Zucc.) Maxim.
タラノキ	タラノキ	タラノキ	タラノキ	Taxus cuspidata Sieb. et Zucc.
(ツクツクホウシ)	ツクツクホウシ	スギナ	スギナ	Cortinarius elatior Fr.
ツクツク	ツクツク	フキ	フキ	Corylus Sieboldiana Blume
テッポ	テッポ	フキ	フキ	Pholiota nameko (T. Ito) S. Ito et Imai
トガ	トガ	イチイ	イチイ	Ramaria formosa (Fr.) Quéf.
ドベタケ	ズベタケ	アブラシメジ	アブラシメジ	Portulaca oleracea L.
ナツグリ	ナツグリ	ツノハシバミ	ツノハシバミ	Torreya nucifera Sieb. et Zucc.
ナメコ	ナメコ	ナメコ	ナメコ	Allium macrostemon Bunge
(ネズミデ)	ネズミデ	ハナホウキタケ (他)	ハナホウキタケ (他)	Synurus palmatopinnatifidus (Makino) Kitam.
ネズミ	ネズミ	スベリヒユ	スベリヒユ	
ヒト	ヒト	カヤ	カヤ	
ヘイトコ	ヘイトコ	?	?	
ホエトネブカ	ホイトニンク	ノビル	ノビル	
ケンザキホウコウ	ケンザキホウコウ	ヤマボクチ	ヤマボクチ	
ボタヒラ	ボタヒラ	?	?	
サマツ	サマツ	?	?	
モトアシ	モトアシ	?	?	

ヤ ブ ウ ド	-----	ハ ナ ウ ド	<i>Heracleum lanatum</i> Michaux
ヤ マ ナ ス ビ	ネズミノタワラ	ツルリンドウ	<i>Tripterospermum japonicum</i> (Sieb. et Zucc.) Maxim.
ヤ マ ブ ド ウ	ヤ マ ブ ド ウ	ヤ マ ブ ド ウ	<i>Vitis Coignetiae</i> Palliat
ヤ マ ユ リ	-----	サ サ ユ リ	<i>Lilium japonicum</i> Thunb.
ヨ モ ギ	ヨ モ ギ	ヨ モ ギ	<i>Artemisia princeps</i> Pamp.
ユ ス ラ	-----	ユ ス ラ ウ メ	<i>Prunus tomentosa</i> Thunb.
リ ヨ ウ ボ ウ	ジ ヨ ウ ボ ウ	リ ヨ ウ ブ	<i>Clethra barbinervis</i> Sieb. et Zucc.
マ マ コ ナ	マ マ コ ナ	ハ ナ イ カ ダ	<i>Helwingia japonica</i> (Thunb.) F. G. Dietr.
マ タ タ ビ	チンボマタタビ	マ タ タ ビ	<i>Actinidia polygama</i> (Sieb. et Zucc) Maxim.
ト	ト	ト チ ノ キ	<i>Aesculus turbinata</i> Blume
マ ツ ガ ブ	マ ツ ガ ン ビ	マ ツ ブ サ	<i>Schisandra nigra</i> Maxim.
ク サ ガ ブ	-----	?	
サル イ チ ゴ	サル イ チ ゴ	エビガライチゴ	<i>Rubus phoenicolasius</i> Maxim.
タ ニ ワ タ リ	-----	?	
ク ロ ッ コ	-----	?	
ハ チ ベ イ	-----		
ア マ チ ャ	-----	ヤマアジサイ	<i>Hydrangea serrata</i> Seringe
ポー ポー	-----	キツネノチャブクロ	<i>Lycoperdon gemmatum</i> Fr.
アカ タ ケ	-----	?	
ベ ニ タ ケ	-----		
ウシガワタケ	-----	?	
ウ ラ ジ ロ	-----	ウラジロノキ	<i>Sorbus japonica</i> (Decne.) Hedl.

神社・寺・祭・農具・繊維・結束・籠・建材関係植物

フ ク ラ シ	フ ク ラ シ	ソ ヨ ゴ	<i>Ilex pedunculosa</i> Miq.
(ク ロ モ ジ	ク ロ モ ジ	ク ロ モ ジ	<i>Lindera umbellata</i> Thunb.
ク ロ シ バ	ク ロ シ バ	ク ロ シ バ	<i>Eurya japonica</i> Thunb.
セ ン ド シ	サ カ キ	ヒ サ カ キ	
(ハ ナ エ ダ	シ キ ビ	シ キ ミ	<i>Illicium religiosum</i> Sieb. et Zucc.
ハ ナ ノ キ			
ヤ ブ コ ウ		ヤ ブ コ ウ	<i>Ardisia japonica</i> (Thunb.) Blume
ス	ス	ス	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don
(マ ン マ ツ	マ ツ	ア カ マ ツ	<i>Pinus densiflora</i> Sieb. et Zucc.
ミ ソ ハ ギ	ミ ソ ハ ギ	ミ ソ ハ ギ	<i>Lythrum anceps</i> (Koehne) Makino
ウ ツ キ	オ ツ キ	ヤ マ ボ ウ シ	<i>Cornus Kousa</i> Buerg.
(カ シ ホ シ	キ ツ ネ バ シ	ネ ジ キ	<i>Lyonia elliptica</i> (Sieb. et Zucc.) Okuyama
ハ エ カ ツ ギ			
ア カ カ メ			
ウ マ ノ フ タ イ	-----	オトコヨウゾメ	<i>Viburnum phlebotrichum</i> Sieb. et Zucc.

クズボウラ	クズンボ	クズ	ズ	Pueraria lobata (Willd.) Ohwi
カンボコ	_____	カンボク		Viburnum Sargentii Koehne
コオダ	ノブ	サワグルミ		Pterocarya rhoifolia Sieb. et Zucc.
サルスベリ	サルスベリ	ナツツバキ		Stewartia pseudo-camellia Maxim.
サンシヨ	サンシヨウ	サンシヨウ		Zanthoxylum piperitum (Linn.) DC.
(スカスキヤ	カヤ	ススキ		Miscanthus sinensis Andress
ハコヤナギ	ドロボヤナギ	ヤマナラシ		Populus Sieboldi Miq.
ボカ	シロギ	コシアブラ		Acanthopanax sciadophylloides Fr. et Sav.
ヤマカゲ	ヤマガキ	シナノキ		Tilia japonica Sink.
ヤマオ	ムシオ	カラムシ		Boehmeria nivea (L.) Gaud. subs. nivea
ヒロレ	ヒロレ	カンスゲ		Carex Morrowii Boott
ボウリョウグサ	_____	?		
ノボセ	ノボシ	チガヤ		Imperata cylindrica (L.)
ガマ	ガマ	ガマ		Typha latifolia L.
ガヤ	ガヤ	イヌガヤ		Cephalotaxus Harringtonia K. Koch
ホウ	ホウ	ホオノキ		Magnolia obovata Thunb.
エンズイ	エンズ	エンジュ		Sophora japonica Linn.
クリ	クリ	クリ		Castanea crenata Sieb. et Zucc.
ガゴウマキ	イバマキ	カシワ		Quercus dentata Thunb.
リョウボウ	ジョウボウ	リョウブ		Clethra barbinervis Sieb. et Zucc.
アベ	アベ	アベマキ		Quercus variabilis Blume
チナイイ	バナノキ	エゴノキ		Styrax japonica Sieb. et Zucc.
ウルルシ	ホンハゼ	ウルシ		Rhus verniciflua Stokes
ハシレウツギ	タケウツギ	ウツギ		Deutzia crenata Sieb. et Zucc.
ケヤキ	ケヤキ	ケヤキ		Zelkova serrata (Thunb.) Makino
シラハシ	_____	ウリハダカエデ		Acer rufinerve Sieb. et Zucc.
コウカイ	コ一カ	ネムノキ		Albizzia Julibrissin Durazz.
フジカズラ	フジカズラ	ノダフジ		Wisteria floribunda (Willd.) DC.

炭・薪関係植物

イタヤ	オオイタ	イタヤカエデ	Acer Mono Maxim
エンズイ	エンズ	エンジュ	Sophora japonica Linn.
ガゴウマキ	イバマキ	カシワ	Quercus dentata Thunb.
カシホシ	キツネバシ	ネジキ	Lyonia elliptica (Sieb. et Zucc.) Okuyama
カネマキ	クヌギ	クヌギ	Quercus acutissima Carr.
サルスベリ	サルスベリ	ナツツバキ	Stewartia pseudo-camellia Maxim.
ミズマキ	ミズマキ	ミズナラ	Quercus mongolia Fisch. var. grosseserrata Rehd et Wils.
ナラマキ	ホウソウマキ	コナラ	Quercus serrata Thunb.
_____	ゴトロウマキ	ナラガシワ	Quercus aliena Blume
ミズキ	サンゴノキ	(ミクマノズキ	Cornus controversa Hemsl. Cornus macrophylla Wallich

チ (ヌ シフ サ	ナ リ オノ ク	イ ダ キシ シラ	バ (ヌ フサ	チ リ ク	ノ ダ シラ	キ ダ シラ	エ ヌ ヤ	ゴ ル マ	ノ デ ザ	キ ラ	Styrax japonica Sieb. et Zucc. Rhus chinensis Mill. Prunus Sargentii Rehd. subs. Jamsakura (Sieb.) Ohwi Betula grossa Sieb. et Zucc. Magnolia obovata Thunb. Ilex macropoda Miq. Acer rufinerve Sieb. et Zucc.
ミ ホ ア シ	ズ オハ ラハ	メ ウ ダ シ	----- ホ	----- ウ	----- ウ	----- ウ	ミ ホ ア ウ	ズ オ オ	メ ノ ハ	キ ダ カ エ デ	

民間薬その他の植物

ア イヌ	セ ノ	ブ マタカ	ア -----	セ -----	ビ アキノ	ア ウナ	セ ギツ	ビ カミ	Pieris japonica (Thunb.) D. Don Polygonum sagittatum L. var. Sieboldi (Meisn.) Maxim.
イ イ	ベ ワ	バナ マツ	カ -----	セ -----	ビ ツリ	フ ネ	ソ ウ	ウ ウ	Impatiens Textori Miq. Selaginella tamariscina Spring
カ ガ	マ イル	ツ グサ	カ -----	セ -----	ビ ツ	ユ ク	サ サ	サ バ	Commelina communis L. Polygonum Thunbergii Sieb. et Zucc.
イ カ	ヌ コ	ウ バナ	ウ カ	ウ ポ	ウ バ	シ ウ	ド ナ	ド ナ	Angelica pubescens Maxim. Rhododendron japonicum (A. Gray) Suringer
キ ク	ツ チ	ネ ナ	-----	-----	-----	ノ ワ	タ シ	ス サイ	Lycopodium clavatum L. var. nipponicum Nakai Duchesnea indica (Andr.) Focke
ク ク	マ チ	ビ ラ	-----	-----	-----	イ ヌ	シ バ	-----	Rumex crispus L. subs. japonicus (Houtt.) Kitamura
ケ コ	ン ボ	ン シ	-----	-----	-----	ツ キ	ヨ タ	ケ ケ	Lampteromyces japonicus (Kawam.) Sing. Pulsatilla cernua Spreng.
サイ ジ	ワイ イ	タ ナ	-----	-----	-----	オ キ	ナ グ	サ サ	Magnolia Kobus DC. Ganoderma lucidum (Fr.) Karst.
タ チ	ウ ド	エ メ	-----	-----	-----	マ ン	ネ タ	ケ ケ	Sorbus commixta Hedl. Weigela hortensis (Sieb. et Zucc.) K. Koch
チ チ	ン ン	グ ガ	-----	-----	-----	ナ ナ	カ マ	ド ド	Hydrocotyle sibthorpioides Lam.
ツ コ	イ ン	ツ ウ	ツ -----	ツ -----	ツ -----	タ ニ	ウ ツ	ギ ギ	Cocculus trilobus (Thunb.) DC. Stachyurus praecox Sieb. et Zucc.
コン ネ	ペ ジ	イト レ	-----	-----	-----	チ ド	メ グ	サ サ	Ranunculus japonicus Thunb. Spiranthes sinensis (Pers.) Ames
バ ヒ	ン ル	ン ム	-----	-----	-----	カ ミ	エ ビ	シ シ	Alnus japonica Steud. Potamogeton distinctus Bennett
ヒ ヒ	ジ ズ	ワ ル	-----	-----	-----	キ ブ	シ シ	バ バ	Digitaria sanguinalis (L.) Scopoli Stellaria media (L.) Villars
ビン ヘ	ボ コ	ウ カ	ユ -----	ユ -----	ユ -----	ウ マ	ノ	ア シ	Sagina japonica (Sw.) Ohwi Paederia scandens (Lour.) Merr. var. Mairei (Lév.) Hara
モ メ	ク ク	ゲ ラ	ム -----	ム -----	ム -----	ハ コ	ベ ベ	サ サ	Hibiscus syriacus Linn. Urtica Thunbergiana Sieb. et Zucc.

ヤマノシヤクジョウ	ツチアケビ	ツチアケビ	Galeola septentrionalis Reichb. f.
ユキワリソウ	_____	ハシリドコロ	Scopolia japonica Maxim.
ヨメノサラ	ツブロ(ギ)	イヌツゲ	Ilex crenata Thunb.
ボニバナ	ボニバナ	(オミナエシ オトコエシ)	Patrinia scabiosaefolia Fisch. Patrinia villosa (Thunb.) Juss.
エゴソラ	_____	クロバナヒキオコシ	Isodon trichocarpus (Maxim.) Kudo
オンバコ	オンバコ	オオバコ	Plantago asiatica L.
キワダ	キワダ	キハダ	Phellodendron amurense Rupr.
スイバ	_____	スノキ	Vaccinium Smallii A. Gray var. glabrum Koidz.
タズ	タズ	ニワトコ	Sambucus racemosa subs. Sieboldiana (Miq.) Hara
ノガヤ	ノガヤ	ワレモコウ	Sanguisorba officinalis L.
ミコシグサ	ミコシグサ	ゲンノショウコ	Geranium Thumbergii sieb. et Zucc.
ロクテンソウ	ヒヤクテンソウ	イチヤクソウ	Pyrola japonica Klentze
(ドクダメグサ ジュウヤク)	イヌノヘグサ	ドクダミ	Houttuynia cordata Thunb.
センブリ	センブリ	センブリ	Swertia japonica (Schult.) Makino
マメイチゴ	アズキイチゴ	ウグイスカグラ	Lonicera gracilipes Miq. var. glabra Miq.
	アカナバ	?	
	トコヒメジ	?	
	キクラゲ	キクラゲ属	
	ハイヒメジ	?	
	カノコナベ	?	
	ササヒメジ	?	
	ナツアイタケ	アイタケ	Russula virescens Fr.
	ヒンビングサ	キツネノボタン	Ranunculus quepaertensis Nakai
		ウマノアシガタ	Ranunculus japonicus Thunb.
	ツチイチゴ	キビノナワシロイチゴ	Rubus Yoshinoi Koidz.
	カンイチゴ	フユイチゴ	Rubus Buergeri Miq.
	アマナ	ナルコユリ	Polygonatum falcatum Asa Gray
	ヤマゴボウ	テリハアザミ	Cirsium lucens Kitam.
	ササバイコリ	サイハイラン	Cremastra appendiculata (D. Don) Makino
	ホド	ツルニンジン	Codonopsis lanceolata (Sieb. et Zucc.) Trautv.
	アワガラ	チドリノキ	Acer carpinifolium Sieb. et Zucc.
	サーカーチ	サイカチ	Gleditsia japonica Miq.
	カシ	ウラジロガシ	Quercus salicina Blume
	ヤマガンビ	?	
	ゴーレンバ	オタカラコ	Ligularia Fischerii (Ledeb.) Turcz.
	タンバ	ヤマコウバシ	Lindera glauca (Sieb. et Zucc.) Blume
	アカシア	ニセアカシア	Robinia pseudo-acacia Linn.
	ゼニバナ	ヤマツツジ	Rhododendron Kaempferi Planch.
	(ホトケノクサイチゴ ヤマギンカン)	?	

ホボロイチゴ	キイチゴ	<i>Rubus palmatus</i> Thunb.
ミチクサイチゴ	?	
イモナゼ	?	
ヤマリンゴ	?	
ムクロージ	ムクロジ	<i>Sapindus Mukurossi</i> Gaertn.
メグスリノキ	メグスリノキ	<i>Acer nikoense</i> Maxim.
ホタルグサ	ホタルブクロ	<i>Campanula punctata</i> Lam.
チヨロビ	?	
ズベラビー	イヌビユ	<i>Amaranthus lividus</i> L.
イモナ	?	
カワラショーブ	セキショウ	<i>Acorus gramineus</i> Soland
カワラハギ	ヒトツバハギ	<i>Securinega suffruticosa</i> (Pall.) Rehd.
ユキワリソウ	スハマソウ	<i>Hepaticanobilis</i> Schreber var. <i>japonica</i> Nakai
ヨメノソデ	オオバクサフジ	<i>Vicia Pseudo-Orobus</i> Fisch. et Mey.
ハシギ	ミツバウツギ	<i>Staphylea Bumalda</i> (Thunb.) DC.
オニカケゼリ	?	
ヒオ	コウゾ	<i>Broussonetia Kazinoki</i> Sieb.
ハデ	ハゼノキ	<i>Rhus succedanea</i> Linn.
ゴマギ	ゴマギ	<i>Viburnum Sieboldi</i> Miq.
トリトマラズ	メギ	<i>Berberis Thunbergii</i> DC.
ジゴクノカマノクサ	?	
タニオオーバコ	?	
コッテイノツノ	キンミズヒキ	<i>Agrimonia pilosa</i> Ledeb.
カネカズラ	クマツヅラ	<i>Verbena officinalis</i> L.
ユウレイバナ	キツネノカミソリ	<i>Lycoris sanguinea</i> Maxim.
トスベリ	イボタノキ	<i>Ligustrum obtusifolium</i> Sieb. et Zucc.
ヤマノキンギンソウ	ダイモンジソウ	<i>Saxifraga Fortunei</i> Hook. f. var. <i>incisolobata</i> (Engl. et Irmsh.) Nakai
カタチ	ツバキ	<i>Camellia japonica</i> L.
トートンボ	ネコヤナギ	<i>Salix gracilistyla</i> Miq.
スズメノアシ	イノモトソウ	<i>Pteris mulifida</i> Poiret
カニツリボウシ	スズメノテッポウ	<i>Alopecurus aequalis</i> Sobol. var. <i>amurensis</i> (Komar.) Ohwi